



昭道報

Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第19号(第7版)
 平成19年6月1日発行
 <発行所>
 関西合気道競技連盟広報部
 <監修>
 日本合気道協会昭道館師範
 成山哲郎
 <編集>
 昭道報編集係

内山雅晴昭道館理事長ご逝去

去る2006年12月6日、昭道館理事長 内山雅晴先生がご逝去されました。享年84歳。12月7日に通夜式、翌日に告別式がしめやかに執り行われ、道場関係者を含め多くの方が参列されました。

心からご冥福をお祈りいたしますとともに、皆様からお寄せいただいた追悼のお言葉をご紹介します。

日本合気道協会昭道館館長 富木昌子
 内山理事長の思い出を語るとそれはもう四十年近くにも及ぶでしょう。親子二代にわたり本当にお世話になりました。

初めてお会いしたのは一九七一年、父に誘われて行った第二回全日本学生合気道競技大会の折ですが、それ以前から「内山さん」というのは私にとつてすっかり馴染みの方でした。父(富木謙治)と、お見えになる学生さんやOBの方々、また母との会話の中に頻繁に出てくるお名前でした。そして父は「内山さん」というよき理解者を得て合気道の研究をますます進めることができるかと熱く語るのでした。今にして思えばまだ名前もつかない胎動期の昭道館の頃です。

それまでも後援の申し出はいくつかあったと聞きますが、父はすべてお断りしていました。それが内山理事長からのお話は素直にお受けしたのです。特別に通じる何かがあったのでしよう。「内山さんは私心なく合気道を真っ直ぐ受け入れてくれる人」であり、「ご本人だけでなく家族にも勧め一緒に稽古をされている。」と大きな信頼を寄せていました。後に内山理事長からも「これは良いものだから是非やってみようと思った。」と当時のお話を伺ったことがあります。こうして合気道に対する二人の純粋な情熱ががっちり結ばれた結果が昭道館なのだと思えます。そして内山理事長のお気持ちは富木師範が亡くなった後も終生変わることなく、今日のNPPO 法人日本合気道協会・昭道館の発展を

支えてくださいました。あらためて心からの感謝を申し上げます。大人のなつても「昌子ちゃん」と親しく声をかけてくださった内山理事長ですが、はじめは父にとつての大切な友人であり後援者という位置づけでした。しかしその晩年には直接的に私に大きな転機を与える存在でした。内山理事長からの強いお勧めがなければ今のような合気道と深く関わる生活はけっして考えられないことで



日本合気道協会昭道館師範 成山哲郎
 内山理事長、心から感謝と哀悼の意をこめて、溢れる思い出とお別れの言葉を、ここに捧げます。

理事長に初めてお目にかかってから既に四十年程が経ちました。自分の両親と共に過ごした日々よりも遙か永きにわたるこの四十年間は、常に理事長の合気道に対する熱い想いとお心遣いを感じる日々でした。

最初にお目にかかったのは、私がまだ国士館大学合気道部主将で、合気乱取法を関西に普及する遠征に参加した時でした。学生の私の目から見て、富木・大庭両師範と内山理事長の

す。父がもうひとつの我が家のように思っていた内山家へ私も度々寄せて頂くようになり、シマエ奥様の料理をいただきながらお話をしました。淡々とした口調の中に強い意思と鋭さを感じさせ、さりげない言葉でいつも励まして下さいました。今までは何かと相談にのつて頂きましたが、これからそれは叶わぬこと。理事長から与えられた宿題は難問ですが、シマエさんと一緒に粘り強く取り組みます。どうぞ見守って下さい。

間には深い信頼関係が感じられ、両師範の合気道へのひた向きな情熱に、理事長が心から共感なさつておられるように感じました。そうした理事長のお気持ちの結晶が昭道館道場であり

縁あつて、その昭道館の専任指導員を拝命した私が専任指導員になってから四―五年程の間は、理事長とお手合わせをする機会が随分とありました。印象深かったのは乱取稽古の時のことです。偶然、私の下段当てが理事長にかかってしまった時に「もう君とは乱取はやらない！」とおつしやられ、それ以降は本当にお手合わせ頂けませんでした。しかし、後になって「色々な奴と乱取をやったけれど、成山君は違う感じがしたよ」とお話しになっていたと伺い、何とも面映く、しかし大変な励みに感じたものでした。また縄跳びが大変お上手で、その理

由を伺ったところ「昔、ボクシングをやっていたんだ。だからケンカで一度も負けたことがないよ」と得意そうにおっしゃられ、若い社員との腕相撲でも、一度も負けた姿を見たことはありませんでした。そんな負けず嫌いな一面が頼もしくもあり、親しみを感じる場所でもありました。

そして内山理事長は、何より富木・大庭両師範との信頼関係を決して裏切らない方でした。会社の事務所からはじまった昭道館が二十四畳の専用道場になり、昭和五十一年には七十畳、昭和六十三年には百畳、そして平成十五年には現在の百三十畳と、大きな道場

私が初めて内山雅晴氏を知ったのは、学生時代かその後のことである。

富木謙治先生の命で成山哲郎先輩が合気乱取り法の紹介に大阪に行くことになり、昭道館という名の道場を中心に、合気道師範・小林裕和先生傘下の諸大学に合気道を広めることになった。この昭道館という道場を富木先生に提供されたのが、昭和土地建物株式会社社長・内山雅晴氏であるということを知り、日本合気道協会の恩人として尊敬するようになったのは、成山先生と共に師範として協会をになうことになった頃からであろうか。内山氏は富木先生の後援者としてだけでなく、協会及び成山哲郎師範の後援者として絶えず私たちの合気道に温かい眼差しを向けて来られた。さりげなく、徳行を積まれた先生に敬意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

日本合気道協会師範 志々田文明

に生まれ変わっていったのは、両師範と理事長の強い絆の証であり、昭道館はまさに三人の合気道に対する愛情と情熱が形になったものと言えましよう。昭道館は両師範の合気道への純粋な想いに対する、理事長の心からの応援の形であつたのだと思います。

また合気道に励む学生に対する応援も常に忘れない方で、古くは三度の台湾遠征をはじめ、事あるごとに学生の負担が軽くなるよう密かにご配慮を頂きましたことにも深く感謝するところでもあります。

内山理事長はよく食べ、よく飲み、よく身体を動かし、健康を気遣う方でした。結婚直後の一年間、理事長と住まいを共にさせて頂いた際には、朝一番の一時間にわたる入浴と、私の妻の焼く柳蝶の干物の朝食を欠かさず続ける健全な毎日に驚かされました。長い入浴時間中には、富木先生に教わった合気体操をなさっている事を知り、毎日の生活に合気道を取り入れておられることに感心致しました。その反面、

飲みに行くのも大好きで、毎晩のように御伴させて頂いた私は、その度に終電を逃して梅田や難波から夜中の散歩をする羽目になったことも、今は良い思い出です。

そんな敬愛する理事長に、私は一度だけ逆らったことがあります。今にして思えば、それは理事長への生涯一度の反抗でした。合気道の指導に生活を賭ける私を、会社の新部門の責任者に抜擢したいとお話がありました。「成山君、純粋すぎると大変な苦勞を背負うよ。清濁併せ呑む時もあるだよ。」と強く勧める理事長に、大阪を離れる覚悟で「それは出来ません」と土下座してお願ひしたところ、「君の気持ちはわかった。今まで通りに合気道を続けなさい。」と言ってお下さりました。あの時のご理解がなければ、今の私はありません。あの一言によって、私は合気道に専念することが出来ました。私の生活を心配して下さった上で私の意志を尊重して下さいました。私のお心遣いを、私はこれからも忘れることはあり

しません。体調を崩されてから、私に「早死にしちゃいかん。長生きしろ。そうしないと合気道に対して申し訳ないんだ」とおっしゃることが何度かありました。「合気道の先生達は皆、逝くのが早過ぎる。君は長生きしなさい」とおっしゃいましたね。理事長、確かに理事長が私の恩師の中で一番長生きでした。それでも、もつともつと長生きして頂きたかった。

私は理事長のお言葉を守れるでしょうか。理事長からお預かりした合気道へのお志しを、あますところなく後世に伝えることが出来るでしょうか。どうかこれからも、今までと変わらぬ愛情と情熱で私を、昭道館を、合気道を、見守って下さい。

限らない感謝と尽きぬ哀惜の想いをこめて、今ここにひと時のお別れを致します。

内山理事長、永い間、本当にありがとうございました。

昭道館草創期の指導員 北山正信

先日、昭道館の成山師範より、理事長が十二月六日にご逝去されたとの訃報の知らせをいただき、驚いております。ここに、昭道館創設者である、内山雅晴理事長のご生前のご功績を偲び、謹んで心より哀悼の意を捧げます。今回、道場の機関紙、昭道報にて追悼の特集号を刊行すること、追悼文の寄稿のご案内をいただきました。最初の出会いから四十年にもなります

が、訃報の知らせを受け、最初に思い出したことを述べさせていただきます。

理事長との出会いは、私が早稲田大学合気道部の現役のとき、富木先生、大庭先生より、関西の建設会社の社長で、自らも有段者であり、個人で道場を提供して、富木合気道の普及活動をしていらつしやる方と伺い、関西遠征のときに、ご紹介いただいたのが最初と記憶しております。

(次頁へつづく)



卒業後、私が就職して、初めて関西の土地で社会人生活をスタートさせ、仕事を終わってから、定期的に、昭道館にて稽古をさせていただき、同時に道場のメンバーにも指導のお手伝いをさせていただいておりました。関西がはじめての私にとっては、会社が肥後橋にあり、昭和町の道場との間の往復が、関西での独身生活の中で、唯一、気持ちの休まる時間でした。稽古が終わると内山社長が待っていてくれ、食事に連れて行っていただき、そのあと、南の繁華街でよく遊ばせていただきました。

食事の時には、合気道について、富木、大庭両先生とのつながり、又社会人としての心構え、社長として、経営者としての心情等々のお話し、時間を過ぎるのも忘れて気がつくとも終電もなく、タクシートのチケットを用意していただき、寮へ帰ったことが思い出されます。

転勤で大阪から離れてからは、ほとんどお目にかかることがなく、年賀状でのやり取りでお元気なご様子ばかりと思っておりました。なかなかお目にかかる機会がないまま、そのまま永遠のお別れとなってしまい、大変残念な思いで一杯です。

あらためまして、私の社会人スタートに際して、いろいろとご指導いただいたことに感謝すると共に厚く御礼を申し上げます。最後のお別れの言葉とさせていただきます。安らかに眠りください。

合掌



昭道館顧問 荒尾敏矩

この度、内山雅晴先生のご逝去の報に接し、心より哀悼の意を捧げます。かつて私が関西社会人合気道競技大会でのお役を務めさせていただきました時に、先生には常になみなみならぬお力添えを注いで頂き、無事に重責を果たす事ができました。今も心から感謝の気持ちを忘れる事は出来ません。

思い出に残るのは、先生が富木先生、大庭先生お二人を大変大事になされ、その恩恵をもってご指導、親睦を通して絆を深めることが出来ました。今もなお、大切に心にしまっており居ります。先生本当にありがとうございました。

これからも先生のご意志を成山先生の元で皆さんが力を合わせ発展に尽くす事が何よりのご供養にもなるものと思えます。先生、どうぞ安らかにやすみ下さい。心よりお悔やみを申し上げます。哀悼の言葉とさせていただきます。



昭道館顧問 馬渡和夫

突然の訃報にはほんとに驚いた。久しぶりに第三十一回の関西合気道競技大会を見学させていただいたが、内山先生のお姿が見えないのを不思議に思った。しかし、訃報に接するとは思ってもよらなかった。内山先生と私はたしか同年齢のように聞いていたが、立派な実業家であり、私には雲の上の人だった。実力もいくつかの武勇伝を耳にした。

私をはじめ昭道館の門をたたいたのは急な階段を上り詰めた奥に畳を十畳ほど横に並べた質素な道場だった。



が、やがて百畳ほどになり、日本合気道協会の中央道場となって富木先生が館長に就任された。

昭道館合気道はいまや押しも押されもせぬ存在であるが、縁の下の力持ちというべきか、それを支えてくださったのが内山先生であった。

富木先生の推挙を受けて成山先生を師範として迎えられたのも内山先生だったし、その成山先生を物心両面から支えてくださったのが内山先生だった。

失礼だが、日本の戯曲の代表作といわれる仮名手本忠臣蔵に出てくる、大坂の天野屋義平を連想した。義侠心が強く、信じたら親身になって尽くす心意気を私は感じていた。このことは、若い人は知らないだろうと思つて感謝の気持ちを込めて書かせていただいた。安らかなご永眠を祈る次第である。



昭道館草創期の指導員 山口升呉

内山雅晴前日本合気道協会副会長との最初の出会いには、私が大学三年の時、大阪の桃山学院大学で富木先生のお供をして、合気乱取法の紹介を大阪地区の各大学合気道部へ行った時でした。

超満員の夜行列車で立ちつくして早朝到着した昭道館で仮眠、食事が出来るように手配して下さっていました。この時の講習会の成功によって、翌年成山師範が乱取競技の本格的な普及の為、大阪に行かれることになったのです。

私が社会人になってはじめての勤務地も大阪でしたので、休みの日には昭道館でよく稽古をさせて頂きました。富木先生が来阪された折も呼んで下さり、席をご一緒させて頂きましたが、いつも柔和で暖かいまなざしで我々の合気道を見守って頂いていたような印象が強く残っております。

日本合気道協会第三代会長の富木房枝様が亡くなった時に、「この合気道は富木先生が作ったのだから、富木家のものである。従つて第四代会長は、娘の富木昌子さんがなるべきである」と主張され、とても我々では言えない、

(次頁へつづく)



しかし明快な論法で紛糾しかけていたこの問題の結論に流れを作つて下さったのです。

私には合気道の恩人としての内山副会長だけではなく、事業家としての大先輩、昭と土地建物株式会社社長としての内山様とお話が出来ることが楽しみでありました。実際には会社の中では相当厳しい方だったと推測できますが、独自の事業観、景気観をお持ちの方で、スケールの大きさを感じました。

富木先生、大庭先生、富木房枝様、和崎先生、そしてまた内山社長と、私の恩師であり、人生の大先輩が次々と亡くなっていかれるのは本当にさみしいことです。残された私達が次の世代の人達の為に何を為すべきなのか自問する毎日です。



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
日本合気道協会指導部長 森川純治

関西で開催される大会にはいつも元気な姿をお見せになり、私共門人を励まされていらつしゃいました。昨年十一月の関西大会にはお見えになりませんでしたので気になっていたら、十二月になって訃報を知らされま

した。

故富木謙治先生との出会いから、その合気道に対するお考えに共鳴され昭道館を創設されて約四十年、その間、実業団スポーツ界においては年々減少の一途を辿っている状況にあるにも拘らず、富木、大庭両先生亡き後も、その熱い心意気は一寸のぶれもなく、現在の世界の競技合気道の中心道場にまで発展させられました。門人の一人としてその正しい実践力に畏敬の念を抱くと共に、競技合気道の普及を志す一人として感謝に絶えません。同時に、その強い御意志は現代人に失われつつある大切な「何か」をご教示下さいました。残された私共はその御遺志を継いで競技合気道の普及に邁進する覚悟です。彼の世界へいかれ富木、大庭、小林諸先生、西村様等先人の方々と合気道談義に花を咲かせられることでしょうか。どうか天上より見守っていて下さい。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
関西合気道競技連盟常任幹事 寺西晴高

内山理事長にはこれまで昭道館を支えていただいていた感謝の気持ちでいっぱいです。そんな理事長がお亡くなりになったことは本当に悲しみに耐えませんでした。理事長は大変明るく、お元氣な方でした。時々ご自宅におじゃまさせていただいた時などは快活とお話になり、お酒も飲まれ、とても楽しい時間を過ごさせてくださいました。残された昭道館の会員の一人としては、成山先生を

中心に内山理事長が遺された昭道館道場がさらに発展されるよう祈るばかりです。

どうぞ安らかにお眠りください。



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
関西合気道競技連盟常任幹事 山形雅章

古稀、「人生七十年、古来稀なれ」一九九二年、内山理事長は古稀を迎えられました。十一月二十二日に行われた関西社会人合気道競技大会（現関西合気道競技大会）の後、阿倍野スポ

ーツセンター近くのホテルホールで祝賀会が開かれました。その時司会をさせて頂いたのですが、下手な進行にもかかわらず、ご丁寧に感謝のお言葉をかけていただいたのがこの前のことのように思い出されます。

今から四十年以上前、富木師範と内山理事長との出会いから昭道館が創設されたと聞いております。人は出会いから心を動かされ何かを始めるものですが、その思いを持ち続けることは容易ではありません。昭道館は今も発展を続けています。それは内山理事長がよき伴侶を得て、その思いを持ち続けていただいたお陰なのです。

古稀のいわれは、唐代の詩人「杜甫」の漢詩の中にある一文からといわれています。現在七十歳まで生きることがはめづらしくなく、まだまだ働きざかりと言われるくらいになりました。しかし四十年以上も初心を忘れず、思いを持ち続けることは並大抵ではないのです。これこそが「古稀」だと思わず。

内山理事長の古稀は、思いのお陰で今日も昭道館でさまざまな出会いがあります。新しい人生が始まります。私たちは感謝の気持ちで一杯です。合掌



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
関西合気道競技連盟常任幹事 安居隆

長年にわたり昭道館合気道を支えて下さった内山雅晴先生が逝去され何も言えない寂しさを感じます。中学三年生で昭道館に入門した私にとって先生は雲の上の存在でしたの



昭道館本部道場内部↑
 昭道館本部道場入り口→
 (2005年5月撮影)



会葬者名簿

大原隆志	大西美緒	大浦毅之	圓乘愛人	岩崎正人	井上哲朗	赤木瑞枝	中川世一	安居隆章	山形雅高	寺西晴夫	馬渡和夫	荒尾敏矩	伊藤寿士	松熊繁美	末廣業太郎	児玉正嗣	西馬修	濱崎正雄	藪内啓寿	木村二郎	吉川英夫	柳利知	森川純治	成山哲郎	富岡浩樹	志々田文明	佐藤竜一	大森清恵	内田滋	井上賀臣	富木昌子
ニハナリー	西井美貴	西井英二	成山佳美	成山哲也	中田重信	中島勝利	津野井久絵	小尾貞夫	巽泰滋	高江美智子	須田喜太郎	菅野健太郎	枝折優	佐子肇	崎里学士	酒井進之介	酒井朱音	権代隆裕	小牧扶美	声元洋美	上月修	倉西敏志	木下真理子	木下大樹	川本卓史	河村未来	栢木かおる	金子祐美	片山恵子	岡田有香	
大井朋美	遠藤綾子	馬越泰樹	上野真理恵	岩田麻衣	岩下興介	稲田聖子	市川泰子	石井彰	阿見香緒里	足立孔明	赤穂宗平	ミズエ堀	山崎保雄	山崎文加	山口広治	森本良絵	本澤勝已	松本ななみ	松下悦子	松井孝好	益田知史	藤本和義	平澤昭雄	東原善一	濱口輝充	橋本佳也	橋本謙三	野原佑資	野下直正		
館香保里	竹原理子	竹中尚生	竹重康宏	瀧井大輔	高瀬亜紀	関口達哉	須一力	城間奈津子	芝辻亮輔	澤内清訓	澤井孝太郎	櫻木武士	齐下はるの	近藤祐子	近藤誠	小松亜依	久保浩之	木村慎吾	北野大輔	北麻友子	河西朋奈	川合千陽	亀田卓大	金本泰士	金森翔子	葛井彩代	笠井慎也	岡部友紀子	岡紀波	大迫里奈	大榎直樹
和田潤	山本義人	山本広之	山本耕平	本松良太	最上和喜	三宅佑昌	峯元優作	南寛子	松本都	松田諭子	前田麻美	細江美	福田裕子	日根整谷美里	左川智哉	樋口達徳	樋口貴光	原田大輔	原田恵那	橋本宏太	野村雄	中山真佑子	永田静	中田久美子	辻本博昭	田中有希	田中智也	田中育子			

弔電頂戴者名簿

日本合気道協会 顧問 木暮浩明
 関東合気道協会 会長 萩原太郎・理事長 小原弘行
 関西学生合気道競技連盟 会長 濱田麗史
 大分県合気道協会 竹本義夫
 宇部興風館 和崎正経
 大阪商業大学合気道部一同
 関西学院大学体育会合気道部一同
 昭道館静岡
 昭道館姫路支部 代表 表西康裕
 昭道館門人 萬谷久美子
 植木則雅
 関西学院大学合気道部 OB 瀬藤英典
 株式会社コミスポーツ&ライフ コミスポーツクラブ 向日町 支店長 澤村有加
 コミスポーツクラブ 生駒
 コミスポーツクラブ 新金岡 篠原郁苗
 コミスポーツクラブ 北千里スタッフ一同
 コミスポーツクラブ 東岸和田 支店長 新西道浩
 株式会社コミスポーツ&ライフ 阪南支社 光明池支店 支店長 国定和司



生花頂戴者名簿



NPO 法人日本合気道協会 会長 富木昌子	松楓会 会長 小林聖造
NPO 法人日本合気道協会 理事長 内田滋	昭道館武蔵野
NPO 法人日本合気道協会 師範 成山哲郎	昭道館生野支部
NPO 法人日本合気道協会 師範 志々田文明	昭道館谷町支部
関東学生合気道競技連盟 会長 菊山榮	昭道館 姫路
関東社会人合気道協会 会長 萩原太郎	昭道館八尾
近畿大学体育会合気道部	昭道館雲雀合気道
近畿大学体育会合気道部 OB 会梅合会一同	狛江スポーツ合気道倶楽部他七倶楽部 代表 森川純治
大阪工業大学 OCF 合気道部	昭道館志賀支部
大阪工業大学 OCF 合気道部 OB 会淀水会一同	昭道館沖繩 植木則雅
天理大学体育総部合気道部	駿台会
天理大学体育総部合気道部 OB 会大和会一同	昭道館上尾
大阪商業大学体育会合気道部	稲合会
大阪商業大学体育会合気道部 OB 会養武会一同	昭道館静岡 桑高正行
大阪商業大学体育会合気道部 監督 木下大樹	成城大学体育会合気道部
関西福祉科学大学合気道部	成和会
関西福祉科学大学合気道部 OB 会乙盛会一同	NPO 法人日本合気道協会 副会長 宇野憲司
大阪芸術大学体育会合気道部	NPO 法人日本合気道協会 副会長 二見健吉
大阪芸術大学体育会合気道部 OB 会一同	NPO 法人日本合気道協会 副会長 山口升呉
立命館大学合気道同好会	大阪武育会 会長 木村二郎
大阪市立大学体育会合気道競技部	昭道館門人一同
大阪市立大学体育会合気道競技部 OB 会一同	NPO 法人日本合気道協会 顧問 木暮浩明
関西学生合気道競技連盟 会長 濱田麗史	稲門合気道会 会長 内田滋
成山千代	早稲田大学合気道部 部長 木村一郎
増田慎・綾子	荒尾敏矩
関西合気道競技連盟 常任幹事一同	大杉光生・絵美子
関西合気道競技連盟 審判部一同	帝京大学合気道同好会 監督 西尾直仁
関西合気道競技連盟 審査部一同	明治大学体同連合気道部
関西合気道競技連盟 有段者会一同	宇部興風館 和崎正経
関西学院大学体育会合気道部	阿倍野区柔道連盟 会長 大丸昭典
合気道角館協会 博進館佐々木道場	山口大学体育会合気道部
昭道館いわき支部 野口智行	中川寛一
関西学院大学体育会合気道部 OB 会一同	阿倍野区剣道協会
昭道館広島支部 原泰志	
国士舘大学合気道部	